

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：22401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24792569

研究課題名(和文) 看護師の役割機能に焦点を当てた療養病床における専門職連携実践のあり様に関する研究

研究課題名(英文) Research on a nurse's roles in the interprofessional work at convalescent beds

研究代表者

丸山 優 (Maruyama, Yu)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：30381429

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、療養病床での多職種連携実践において、看護師が発揮している役割機能とその特徴を明らかにするために、療養病床で働く看護師と他職種者にグループインタビューと多職種連携実践力調査を行った。その結果、看護師は多職種チームの中で、情報を統合し患者の目標の到達に向けて他多職種者に働きかけ、患者の療養生活が円滑に進むよう活動する役割機能を発揮していた。連携実践力の調査結果では、看護師集団は他職種者集団と比較して実践力の自己評価が低く、連携実践の発想をもつ者の割合が低かった。管理職者では、他職種者と同程度の評価であった。これには、看護師集団が看護チームとして働いている現状が影響していると考えられた。

研究成果の概要(英文)：In this research, the roles which the nurse exhibit and their characteristics were clarified in the interprofessional work at convalescent beds. 6 group interviews and interprofessional work competencies survey were conducted. As a result, in the interprofessional team, the nurse integrated in formation, worked on other multi-occupational description persons towards attainment of a patient's aim, and exhibited the roles which work so that recuperation of patients may progress smoothly. In the results of interprofessional work competencies survey, the nurse group had the low self-evaluation of competency as compared with other occupational description person groups, the ratio of person who had recognition about cooperative practice was low. For the nursing managers, it was same degree as other occupational description persons. It was thought that the present condition which the nurse group is committing as a nursing team had influenced this.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：多職種連携実践 療養病床 看護師の役割機能

1. 研究開始当初の背景

社会の超高齢化と共に、医療の高度化、複雑化、さらには価値観の多様化に伴い、チーム医療の推進が期待され、近年いかに連携した実践を進展させるかに関心が高まっている (WHO2010)。IPW は、イギリスで提唱された概念で、専門職としての成熟した人間関係を基盤とした専門職チームによる協働した活動を意味し、活動の目的は援助対象者の目標を達成することであり、そのためには援助対象者に関わる専門職者各々が相互に理解しつつ、援助対象者の理解を深め、自らのもつ専門的な知識と技術を提供しあいながら、援助活動を実践することが求められ (Leatherd1994) 世界各国に広がっている。日本でも、2008 年に日本保健医療福祉連携教育学会 (JAPE) が設立され、実践と教育の発展を目指して学術的に推進され始めている他、質の高い医療の実現のために医療者の専門性を高めつつ、チーム医療として統合することが求められている (厚労省 2010)。IPW のための教育である専門職連携教育 (Interprofessional Education; 以下 IPE) で育まれる能力や、IPW において各専門職が果たす役割、機能、そのために必要な能力について研究がされている (Barr1998; 大塚 2008; 大塚 2011; CIHC2010)。IPW に必要な能力として、役割の明白化、リーダーシップ、コミュニケーション等が明らかになっているが、これらは保健医療福祉の場で多専門職で援助活動を行うために普遍的な能力として示されており、チーム活動の場やチームを形成するメンバーの違いによる特徴等は検討されていない。

療養病床は、状態が安定し長期にわたり療養を必要とする患者を対象とする病床で、2006 年の医療制度改革関連法の成立にともない、介護型療養病床の廃止、医療型療養病床の削減という再編が掲げられたが、医療制度改革や介護保険制度改正では、在宅医療の充実が図られてはいるが、その整備は十分ではなく (日本療養病床協会 2007)、中間評価の段階でその削減については凍結されており (厚労省 2010) 療養病床へのニーズは依然として高い状況である。療養病床におけるチーム医療に関する調査において、リーダーシップを担う職種は医師、看護師が二分している (日本慢性期医療協会 2009)。看護師は患者の 24 時間の生活を支える役割を担っており、チームでのリーダーとしての役割が期待される存在である。実際に、療養病床で働く看護師が他職種者に対して指導的な立場に立ちながら実践している様子が示唆されている。看護師の役割機能については、チーム医療の推進のために役割拡大が期待されている他 (厚労省 2010)、高度実践看護師制度の確立に向けて提言 (日本学会議健康生活科学委員会看護学分科会 2011) が出される等、その役割機能について議論がなされようとしている。本研究は、看護師の役割機能につ

いて、療養病床における IPW の視座から明らかにするもので、看護師の実践の一端を示すものとして有用であるといえる。

2. 研究の目的

本研究では、療養病床で働く看護師と同チームで働く他多職種者 (医師、介護福祉士、理学療法士、作業療法士、栄養士、医療ソーシャルワーカー等) に既存の IPW 実践力評価票 (大塚 2011) による調査とフォーカスグループインタビューを行う。これらの調査から看護師が療養病床での IPW に発揮している役割機能、チームメンバーに期待される役割機能が明らかになる。これらの結果を統合し、看護師の役割機能を十分に発揮した療養病床の IPW のあり様を明らかにする。

3. 研究の方法

研究 1: 療養病床で働く専門職者の IPW 実践力 (調査票調査)

(1) 対象者

関東地方の A 県内の療養病床で働く保健医療福祉の専門職者

(2) 対象者の選定方法

当該県の HP に掲載された療養病床を有する病院を抽出し、院長宛てに研究協力依頼をした。

(3) データ収集方法

大塚らによって開発された自記式 IPW 実践力調査票 (24 項目) を用いる。さらに、実践力とチームのあり様の関連を検討するために、チーム風土尺度 (14 項目)、ストレス尺度 (22 項目) 属性を調査項目として、調査票を作成した。

調査票は、研究協力の承諾が得られた担当者宛てに送付し、各施設の該当職員に配布してもらった。対象者からは、個別に郵送にて調査票を回収した。

(4) 分析方法

回収された調査票について、各項目の単純集計の後に、因子分析、比較検定、相関分析を行った。分析には、統計解析ソフト IBM SPSS Statics for Windows 21.0 を用いた。

(5) 倫理的配慮

研究協力の依頼にあたり研究の主旨を説明し、調査票の返送は個人の自由意思によるものであることを保証し、書面で研究協力の同意を得た。研究協力施設と対象者は匿名化し、調査票においては ID で管理し、研究参加による不利益を被らないように配慮した。なお、研究の実施にあたり、埼玉県立大学倫理審査委員会の承認を得た。

研究 2: 療養病床で働く看護職者の IPW における役割機能 (グループインタビュー)

(1) 対象者

関東地方 A 県内の療養病床で働く保健医療福祉の専門職者

(2) 対象者の選定方法

当該県の HP に掲載された療養病床を有す

る病院を抽出し、院長宛てに研究協力依頼をした。対象施設で働く保健医療福祉の専門職者で、自分の行っている援助について語れる者とし、同一の患者に関わるチームの多職種専門職者（看護師、介護福祉士、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカー等）を紹介してもらった。

(3) データ収集方法

フォーカスグループインタビュー法（Holloway 2000）を用いた。対象者間に相互作用が生じ、療養病床におけるチーム実践の現実が描出されるようインタビュー環境を整え、研究代表者はファシリテーターの役割を務めた。インタビューで話された内容は対象者の許可を得て録音し、逐語録とした。

(4) 分析方法

各対象者の逐語録から、療養病床における多職種者が協働した実践の内容を抽出し、看護師の役割機能について質的帰納的に分析した。

(5) 倫理的配慮

研究協力施設の管理者と対象者に研究の主旨を文書をもって説明し、研究参加への同意を得た。逐語録を作成するためにインタビュー内容を録音する了承を得た。業務に支障のない時間を設定できるよう配慮し、対象者の個人が特定されないよう研究協力施設と対象者は匿名化し、プライバシーを保持し、研究参加による不利益を被らないように配慮した。なお、調査の実施においては、埼玉県立大学倫理委員会の承認を得た。

4. 研究成果

研究1：療養病床で働く専門職者の IPW 実践力（調査票調査）

(1) 調査の概要

施設長から研究協力の承諾が得られたのは、A 県下 128 施設中、13 施設 477 名であり、調査票の回収数は 395 件（回収率 82.8%）であった。

(2) 対象者の概要

回答が得られた 395 件の職種の内訳は、医師 14 名、看護職者 156 名（正看護師 105 名、准看護師 51 名）、介護職者 55 名、看護助手 52 名、栄養士 23 名、薬剤師 3 名、PT29 名、OT18 名、ST8 名、SW2 名、MSW10 名、病棟クラーク 9 名、その他 16 名（無記入含む）であった。所属する病院は高齢者専門の病院が 21.4%、一般病院が 78.6%であり、管理職者が 78 名（20.8%）含まれている。病院規模は、100 床未満が 78 施設（20.7%）、100 床から 299 床が 256 施設（68.1%）、300 床から 499 床が 41 施設（10.9%）、500 床以上が 1 施設（0.3%）であった。対象者の平均年齢は 40.99 歳（SD=11.73）、経験年数の平均は 11.82 年（SD=9.30）、療養病床の平均経験年数が 5.93 年（SD=5.49）であった。

(3) 結果

IPW 実践力

1) IPW 実践力の構造の確認

回収された調査票のうち、当該項目に欠損値のない 358 件を分析の対象とした。

本研究で使用した IPW 実践力調査票（24 項目）は急性期病院の職員を対象に開発中のものであり、長期療養を支援する療養病床で活用できるか否かは未確認であったため、まず尺度の確認を行った。

各項目について、反収集計の後に、平均点、標準偏差を確認し、天井効果、フロア効果を検討したところ、6 項目で天井効果、1 項目でフロア効果が見られた。この 7 項目を除外し、17 項目で因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、2 因子が抽出された。それぞれの因子は、第 1 因子「他職種者と対象者の支援を促進する能力」（9 項目）、第 2 因子「他職種者との関係性をつくる能力」（8 項目）であった。因子負荷量は、それぞれ 0.452～0.900、0.440～0.771 であった。尺度全体の Cronbach' 係数は 0.945、因子については、それぞれ 0.935、0.895 であった。

2) 職種による比較

明らかになった 2 因子について、職種をグループ化し、平均点を算出した。

表 1 職種ごとの対象者の概要と平均点

職種	N	17項目	SD	第 1 因子	SD	第 2 因子	SD	平均年齢
医師	14	50.64	8.16	28.21	4.93	25.71	4.05	54.09
看護職	153	42.03	11.03	22.15	6.87	22.37	5.62	43.08
介護職	31	50.74	9.53	27.13	6.28	26.74	4.72	47.06
介護職	45	40.33	11.03	20.71	7.04	22.11	5.52	43.41
看護助手	42	38.57	10.10	18.52	6.85	22.29	5.24	44.44
栄養士	19	38.16	10.88	18.89	6.68	21.21	5.75	36.06
薬剤師	3	45.67	8.33	24.33	6.81	24.67	3.21	45.50
理学療法士	28	48.29	9.36	25.79	6.15	25.25	4.35	31.15
作業療法士	17	48.18	8.42	25.41	6.43	25.47	3.74	29.12
言語聴覚士	8	53.00	6.21	28.88	4.36	27.50	2.78	30.00
社会福祉士	2	60.50	0.71	32.00	1.41	32.00	0.00	33.50
医療ソーシャルワーカー	9	52.89	7.57	28.67	5.00	27.33	3.61	32.89
病棟クラーク	9	33.67	8.53	14.22	5.80	20.89	5.30	43.00

看護職と他職種の平均点について、Mann-WhitneyU 検定を行った。（有意水準 p 0.05）得点で、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーの方が有意に高く、病棟クラークの方が有意に低かった。第 1 因子については、医師、理学療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーの方が有意に高く、看護助手、医療ソーシャルワーカーの方が高く、看護助手、栄養士、病棟クラークの方が有意に低かった。第 2 因子については、医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーの方が有意に高かった。

看護職は、病棟での業務において看護師チームを形成して業務にあたる状況が多いため、看護職者のうち、管理者のみを抽出して同様に比較検定したところ、他職種より低い項目はなく、介護職者、看護助手、病棟クラークよりも総得点、第 1 因子、第 2 因子共に有意に高かった。

IPW 実践力とチーム風土の関連

チーム風土測定尺度は、Anderson & West（1998）によって開発されたチームにおける革新的風土を測定する尺度についてフィンランドの保健福祉領域のチームを対象に検討された短縮版（Kivimaki & Elovainio

1999) を活用した。翻訳にあたっては、Anderson & West の調査項目を基に日本で開発されたチーム特性チェックリスト (JILPT 2003) の邦訳を使用した。回答にあたって、多職種チームの状況について回答してもらうために、異なる専門職種者と協働して患者の目標の達成を目指すチームと注釈し、多職種チームをイメージできる者のみ回答してもらった。

チーム風土測定尺度短縮版について、日本語版での検討がなされていないため、尺度の確認を行うために因子分析 (主因子法、プロマックス回転) をおこなったところ、原版と同様に 4 因子が抽出され、原版と同様の構造が示された。Cronbach's α 係数は尺度全体で 0.945、それぞれの因子では、0.878、0.909、0.898、0.826 であった。因子負荷量は、0.550 ~ 0.985、0.579 ~ 0.918、0.700 ~ 0.940、0.489 ~ 0.747 であった。

IPW 実践力調査項目 (17 項目) とチーム風土尺度短縮版 (14 項目) の回答に欠損がない 217 件について、それぞれの合計点について Pearson 相関を検定したところ正の相関が認められた。($p < 0.001$)

IPW 実践力とストレスの関連

ストレス尺度については、看護師用に開発された職場ストレス尺度 (福田 2005) 22 項目を他職種にも適用できるように文言を一部修正した調査項目を用いた。

単純集計の後に、天井効果、フロア効果を確認したが、除外する項目はなかった。因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行い、5 因子が抽出された。いずれの因子にも高い負荷量をもたない項目 2 項目を削除し 20 項目で再度因子構造を確認したところ、先行研究の結果と同様の構造を示した。尺度全体の Cronbach's α は 0.859、それぞれの因子は 0.757 ~ 0.821 であった。

IPW 実践力調査項目 (17 項目) とストレス尺度 (20 項目) の回答に欠損がない 217 件について、それぞれの合計点について Pearson 相関を検定したところ負の相関が認められた。($p < 0.001$)

多職種で協働するチームをイメージできない者

調査票回答者のうち、「異なる専門職種者と協働して患者の目標の達成を目指すチーム」をイメージできない者が 111 名 (28.1%) だった。

111 名の内訳とその職種内の割合は、医師 2 名 (14.3%)、看護職 48 名 (30.8%)、介護職 21 名 (38.2%)、看護助手 22 名 (42.3%)、栄養士 6 名 (26.1%)、理学療法士 5 名 (17.2%)、病棟クラーク 4 名 (44.4%)、その他 3 名 (37.5%) であった。イメージできるか否かについて、年齢、経験年数について Mann-Whitney U 検定を行ったが、いずれも有意差は認められなかった。(有意水準 $p < 0.05$) 施設ごとにイメージできる者の割合は、44.4% ~ 100% であった。

研究 2 : 療養病床で働く看護職者の IPW における役割機能 (グループインタビュー)

(1) 対象者の概要

施設長から研究協力の承諾が得られたのは、A 県下 128 施設中 6 施設、7 グループであった。1 グループあたりの人数は、5 名から 7 名で、職種は医師、看護師、理学療法士、MSW、栄養士、薬剤師、介護福祉士、看護助手、病棟クラーク、歯科衛生士、レクリエーションワーカーで、のべ 45 名である。いずれのグループには看護師が 1 名入るようにグループメンバーの調整を依頼した。

(2) インタビュー調査の概要

インタビューは、研究者が施設に赴き、院内の会議室等で 1 時間の予定で行った。インタビューガイドは 多職種チームでの活動について「うまくいった」と思う経験「うまくいった」と思う経験について、その時の他職種との関わり、看護職者との関わりや相互作用について 多職種チームでの活動について、「うまくいかなかった」と思う経験

「うまくいかなかった」と思う経験について、その時の他職種との関わり、看護職者との関わりや相互作用について 療養病床でのチーム活動についての期待について、である。研究者はファシリテーターとして、日々の実践における各参加者の働き、思いが表現されるように努めた。

(3) 結果

インタビューで話された内容を逐語録として、分析データとした。多職種チームにおける看護師の役割機能を導くために、内容分析を行った。具体的には、個別の事例について話されたエピソードを抜き出し、そのエピソードにおいて「看護職者の患者に対する関わり」を抽出し、「看護職者が他職種者に関わりにかかわったか」を、その意味内容を反映して端的に表現し、類似するものを整理した。

多職種チームにおける看護職者の役割機能として【対象者に寄り添う者として、多職種チームで関わる中で患者中心の立場をつらぬく】【対象者に関わるチームの一員としての役割を果たす】【対象者の状態を把握するために情報を収集し、統合する】【対象者に必要な支援をアセスメントし、他職種者に相談、交渉し、実施する】【他職種者が適切に患者に関わるようにする】【家族と他職種者の中継役となる】の 6 つの役割機能が見出された。

【対象者に寄り添う者として、多職種チームで関わる中で患者中心の立場をつらぬく】では、看護師が患者に関わる多職種間の異なる様々な理解を共有して、患者中心の議論となるように導くものである。【対象者に関わるチームの一員としての役割を果たす】では、チームメンバーで検討し、決定された内容を一メンバーとして遂行したり、チーム内で必要と感じたカンファレンスを招集したりするものである。【対象者の状態を把握するために情報を収集し、統合する】は、患者の状

態を理解するために他職種者と情報をやりとりしたり、意図的に他職種者から情報を収集して援助するものである。【対象者に必要な支援をアセスメントし、他職種者に相談、交渉し、実施する】は、患者の回復の可能性を見出して援助の方向性を検討したり、より適切な援助を実施するために相談し、交渉するものである。【他職種者が適切に患者に関われるようにする】は、患者と他職種者双方のために、患者のスケジュールや状態を他職種者に伝え、調整するものである。【家族と他職種者の中継役となる】は、家族の訴えについて看護師が窓口となり、他職種者につなぐものである。

今後の展望

フォーカスグループインタビューによる調査から、療養病床において看護師が多職種チームの中で、患者中心の立場を貫き、情報を統合し、患者の目標の到達に向けて他職種者に働きかけ、かつ、家族との中継役を担い、日々の患者の生活および他職種者の実践が円滑に進められるように活動する役割機能をもつことが示唆され、患者の療養生活を支援する上で重要な役割を担っていることが明らかになった。

しかし、一方で看護師スタッフ集団の IPW 実践力は他職種者と比較して低く、管理者が保有する能力となっていること、かつ多職種チームの発想をもつ者の割合が低いことが明らかになった。看護チームとして働いているために、一看護スタッフとしては他職種者との関わりが必要のない現状が影響していることも考えられる。

IPW 実践力とチーム風土、ストレスに相関が認められ、協働する実践力をもつことがチーム環境を改善し、より働きやすい環境を創ることが期待できる。これは、ケアの質向上につながるものである。

看護師集団の特徴を鑑みて、看護師集団のリーダーを担う者を対象に他職種者との連携実践力を培う教育を促進すること、スタッフ看護師が、看護師チームとして患者に関わりながら、他職種者をも含めたケアとして実践を考えられるシステムを構築することが療養病床における多職種協働ケアの実践、ひいてはケアの質の向上に向けて有効であると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

なし

〔学会発表〕(計 1 件)

丸山優：療養病床で働く看護師のストレス要因の検討 - 他職種者との比較から - . 日本老年看護学会第 19 回学術集会 2014.6 名古屋

〔図書〕(計 0 件)

なし

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 優 (MARUYAMA YU)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師

研究者番号：30381429

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし